

浄土

1981-6

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別扱承認雑誌) 第三二五号
昭和五十六年五月二十五日印刷 昭和五十六年六月一日発
第四十七卷 第六号



「いのち」の洗濯をしよう

うっとうしい梅雨をことしも迎えた。緑を
いっそう濃くする草木にとっては、この上な
いプレゼントとなる梅雨であるが、私たちに
とっては、一年のうちでいちばん気分の滅入
るシーズンである。

屋外はいうに及ばず、屋内までもが湿気を
帯びてくる。身体が変調をきたすのも無理な



のは、春先より痛み出した胃が、検査の結果
初期の症状ではあったが胃潰瘍と診断された
のである。そこで指示に従い投薬と食事療法
をつづけたが、一進一退の状態であった。も
う大丈夫と思いつつも、少しでも痛みが走る
と、まだめんど、諦めの気持が先行しがち
であった。そして、心身とも晴れぬままに梅
雨どきを迎えてしまった、とい
うわけである。

気分次第で云々、とよくいわれ
るが、まことにそのとおりであ
る。うまく乗れば大きな成果
が期待できる。その逆であれば
惨憺たる結果に終ることにな
る。今回は、この思いを十分に
味わうことになってしまった。
悪くは考えたくないが、考えれ
ば考えるほど悪いことのみが脳

いところである。

私ごとで恐縮だが、
私にとってことしの梅
雨は、とりわけ憂鬱な
ものとなった。という

裏に浮んでしまふのである。気分転換をし、
なんとか踏ん切りをつけようと思いつつも出
来ない、そんな日々の繰り返しであった。
私たちは、身体に変調がない限り、それが
当然であるかのように日々くらしている。健
康体でいられるありがたさを忘れたまま、
慢然としてくらしているのである。

ここに落とし穴がある。生涯を健康体のまま
くらせれば、こんなに倅せんことはない。だ
が、これは十中八九無理な注文である。一生
涯、病なしの人生を全うできる人は皆無に等
しいからである。知らぬが仏でくらせればよ
いが、そうはいくまい。他人にいった義理で
はないが、病に罹ってからではおそいのであ
る。そうならないためには、平生のくらし方
や健康管理が大事となってくる。

与えられた「いのち」は、ただひとつであ
る。このひとつの「いのち」を生かすも殺す
もくらし方ひとつにかかっている。

悔いのない人生を全うするためにも、ここ
らあたりで、己れの身体の状態を見極めて、
念には念を入れた「いのち」の洗濯をされて
はいかがであらうか。

(長谷川宣丈)

六月号



念仏とは、専ら弥陀仏の名を
称する、これなり。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P.170)

目 次

法 話

父母は是れ能生の因縁……………北 邨 謙 順……(2)

宗教的情操を養う……………滝 俊 立……(12)

(す)(い)(そ)(う) 第二の人生の出発……………中 島 照 然……(15)

安居(あんご) 俳談……………細 田 隆 善……(6)

<随想> ほとけとの出会い(十二)……………佐 竹 隆 三……(18)

寄 稿

ホラ(法螺)……………合 島 近……(22)

敦煌にて……………江 目 達 雄……(32)

詩・・・六月の花……………清 川 宗 治……(30)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(26)

<表紙のことば> 雨の季節……………土 屋 正 男……(28)

<表紙裏・巻頭言> いのちの洗濯をしよう……………長 谷 川 宣 丈

念仏ひじり三国志⑤ ——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

法 話

父母は是れ能生の因縁

今年もはや六月となりまして、やがて父の日を迎えます。二十一日でございます。そして五月の十日でしたが、母の日がありました。それぞれの家庭におかれまして、子ども達が、様々なアイデアによって、母の日を過し、父の日を迎えることでありましょう。

そうしたことから、父母の事を少し考えてみたくなりました。多少、時代はなれの感覚にも存ぜられますが、然し乍ら、それならばそれで、誰かが言い遺しておいて、もよろしい事かとも存じます。

私は若い頃に父母共に死別いたしましたので、父母を

北 きた
邨 むら
謙 けん
順 じゅん

(大本山光明寺執事長
南足柄市西念寺住職)



考え、その孝養について語る資格はありません。ないのですけれども若くして両親を失った者だから、又、遠慮無く物が言えるということもございます。私もかなりの年月の間、両親不在の不幸を歎いて、人知れぬ淋しさを懷いて月日を送りました。然しながら、三宝の恩に導かれ、お蔭をもって、その不幸を有りがたく我が身に頂いて参りました。自身の事で深くは申し上げません。又、何かのご縁を待つことにいたします。

題名の「父母は是れ能生の因縁」は、宗祖様の逆修說法というお書物より拝借いたしました。宗祖様はその統

きとして「大重恩あり。宜しく孝養を行ふべし」と申されてあります。能生の因縁（おうしう いんねん）というのは、この世に生れることのできたもと、ということでありますから、父母というのはそういうものであるから、大重恩があるのだと。恩の上に重をのせてその上に大がのっている。大きくて、重くて、大へんな恩があるといっておられる訳であります。それが、夫々の父、母というものだという訳であります。さてその孝養の仕方でありますが、これに世間の孝養と出世間の孝養があると述べられる。世間孝養とは、俗世間の人倫道德上の孝養である。孔子さまなどが昔から教えられた通りである。ところが、真実の孝養というのは、そこで終ってはならないと申される。さて何があるのかと尋ねると、出世間の孝養というのがありと申される。世間を出るとあるから出家をすることかと早計なさるかもしれない。子供が全部出家すると、出家天国になる。親が全部出家したら出家地獄が現われるかもしれない。そうではなくて、宗祖様は、自らが帰依心を持つということ。その上で両親をして三宝帰依の人となつて頂く。これが真実の孝養であると仰せになる。そんなことよりも、良い居宅を考え、口に合ったものを

食べて貰つて両親に世間の孝養を尽す方が、真実の孝養ではあるまいかと、お考えの方も多いに違いない。又、親の方も、親子で念仏に励むことよりは、おみやげの一つでも多く貰つた方が宜しいと思われる方々も少くはないかもしれません。然しながら、お互に現在では、物よりも心がほしいと気付いておいでになったのではありませんか。冷暖房完備の居間に押しこめられて暮すより、何は無くとも、たとい我家は九尺二間でも、親子揃つて和気暖々の暮しがいいと仰しやる老人が無数に居る現代です。そこに、世間からもう一つぬけ出た何かが必要になる。お互に今日の時代では、高等教育を受けた方々で満ちている。みんな偉い知識人だ。インテリだ。そのインテリで何でも分っている筈の人々が、親を殺したり、捨てたりするのはどういう訳であらうか。大体、偉い人で家中が一ぱいになると家庭騒動が必ず起る。どうするかというと一文不知になる。何でも知っている人でも、一文不知になる。一文不知になつてどうする。お念仏するのです。一文不知でお念仏できたら、親も子もできたら、それが出世間の孝養になる。お互に一文不知ですと愚鈍の身になつて手を合せたら、我が家の闇が光に変

る。宗祖様が一枚起請文の終りのところに、ちゃんと書いて遣されてある。

宗祖様が、父母大重恩と申されたのは、觀經に三福行ということが説いてあって、そこで、釈尊が「孝養父母」ということを申されたのを解説なさったからであります。従いまして、宗祖様だけではありません。善導大師も当然同じ箇所、父母重恩にふれておられるし、そして又、父母が三宝に帰することを以て最終の孝養となる。觀經疏の序分義に出て参ります。

「すでに父母あれば即ち大恩あり。若し父なくば能生の因即ちかけん。若し母なくば所生の縁即ちそむく……」と出ております。「かけん」というのは「欠けん」であります。「そむく」というのは「離れる」意味であります。そして、懷妊から出生・成長と及んで「長大なるに及んで、婦を愛し兒を親しみて、父母の処に於て、かゝりて憎嫉を生じて恩孝を行わざるものは、即ち畜生と異なることなし」と出て参ります。ここを読みますと、今の時代と同じことであるのに驚きます。人間というものは、一三〇〇年の昔も、今も変らんものかと驚きもするが歎息もします。出世間の孝養がぬけると同じです。畜

生に同じ、ということで孔子が似たようなことを話しておられる。

子遊という人が尋ねた答に、「今の孝は是れ能く養うを謂う」とあります。つまり物をえることでありましよう。物をあてがってあげばそれでいいということでしょう。さてその次が問題点になります。「犬馬に至るまで皆能く養う有り」と物をあてがって生かしておく分には、犬も馬もやっているではないかと仰しやる。それでは何が大切なのかというと、「敬せずんば何を以てか別たんや」と。「敬い」ということを棄れたら、犬馬と人間とどこが違うのだ、ということであります。大經には「当相敬愛」というお言葉があります。

敬がでて参ります。「当に相い敬愛すべし」という仰せであります。原の文に当たりますと、釈尊のたまわく、「世間の人民、父子、兄弟……当に相い敬愛して、相い憎嫉なく……」とあります。釈尊が念を入れて、父子と加えてあるところを注目したいのです。

民俗学者として、今日もなおその評価の高い柳田國男という方の説ですが、「ウヤマウ」という語原は「オヤマウ」にあると見る。親を敬うことが敬うとなったとい

うのであります。恭敬修くわうきうしゆは浄土宗徒の大切な生活信条でありますが、恭敬とあります。恭しく敬うとなります。

ウヤマウのウヤは恭しくのうやのようにも考えられますが、私共にとって恭敬の心を以て接することが宗祖以来の信条であることを銘記して暮したいものであります。

さて善導様の処へ戻りますが、父母大恩に続いて更に筆をのばされる。积尊時代の話が出て参ります。积尊御在世のある年、大飢饉が襲う。人皆餓死して白骨累々たる惨状が出現する中で、积尊も又、日々に食なくやせ細っていかれる。これは大へんと見かねた一人の比丘が決心する。大事な三衣をうっても积尊に食べて頂きたい。

そして実行して、ご飯を奉るのです。积尊喜んでお食べになると思いきや厳しい言葉で言われる。「お前に父母があるか」「はい、ございます」「今からすぐにいって父母に食べさせよ」「积尊より先に何故でございますか」「父母能く汝が身を生めり。汝に於て大重恩あり」と。ここで再び大重恩という言葉にありました。宗祖様はこの言葉を頂かれたに違いありません。

そして更に話のはのびます。「汝が父母、仏を信ずる心ありや」比丘が答える「すべて信心なし」と。すべてと

いうのは全く・まるっきりのことでありましょう。全くの無信心ぶしんじんでございます、と恥かしそうに言ったに違いない。积尊、言葉をついで「汝の飯によりて大歡喜せん。その時が信心を發す時だ。三宝に帰せしめよ」と仰せになる。ここにも世間の孝養のみならず、出世間の孝養がちゃんと説かれてある。善導大師は、続いて、积尊ご自身、成道の後、天上の母上に対して、一夏の説法をなさった。そして十月懷胎の恩に報ぜられたのだ。ましてや我等凡夫が父母を重くせぬことがあろうか、と締めくくっておられます。

宗祖様が父母大重恩を説かれた時、今は亡き両親に向つて拝まれたに違いない。ご両親はつとに篤信の仏徒徒であった。母は宗祖懷妊くわいにんの十月、「こころ柔和にして、三宝に帰する心、深かりけり」と勅伝第一に伝えてある。両親の帰依恭敬の心が、宗祖という稀有けうの大人物を生んだものにちがいない。

昭和五十七年四月は、宗祖降誕八百五十年に相当する。宗祖降誕を心から慶祝すると同時に、このご両親のご恩にも酬答を申し上げたいと存じます。



安居（あんご）俳談

ほそ だ りゅう ぜん
細田 隆 善

（芭蕉記念館主任、俳号豊明）
（東京・三好勢至院住職）

○ 芭蕉の安居の句

芭蕉の「奥の細道」のはじめの方の一説に、

「廿余丁、山を登って滝有。岩洞の頂より飛流して百尺千岩の碧潭に落たり。岩窟に身をひそめ入て、滝の裏よりみれば、うらみの滝と申伝え侍る也。

しばらくは滝に籠るや夏の初め」

元禄二年（一六八九）春、深川芭蕉庵を出達、奥の細道に出た芭蕉が、日光東照宮に参拝したときの句である。そのとき芭蕉は、東照宮の奥六キロほどある裏見の滝を見物した。その名のとおり滝の裏側に回って滝を見ることができたが、明治三十八年の洪水のため、昔の奇観はなくなってしまった。

この滝に荒沢不動が祀っており、このような滝では荒行が行われるものである。芭蕉が訪れたときも、行者が籠堂において夏安居の行をしていたのである。旅の道中

のためそこにながくは居られなかったが、しばらく清浄な気分になって時を過した意味の俳句である。実際は後年、「奥の細道」紀行文執筆のときの作品といわれている。「夏の始め」は夏安居のことで、初夏のことではない。初夏の季節ではこの句の意味が薄くなる。俳句の季節にとり入れられた安居の意義は、深いものがある。

○ 芭蕉記念館完成

深川芭蕉庵の史跡は、芭蕉が延宝七年（一六七九）三十七歳から、元禄七年（一六九四）五十一歳で没するまで、生活の本拠とし、深川芭蕉庵を根拠地として、各地の旅に出で、「奥の細道」などの著名な紀行文を残し、古池の句などの名吟を残し、わが国の文学史上、俳諧史上巨大な足跡を留めたところである。

この史跡が江東区常盤一丁目にあったが、僅か二十平米の狭い場所にあった。たまたま近くの同町内、隅田川沿いの地、八百平米を江東区において入手、この地に史跡を移して、鉄筋三階建て延建坪八百五十平米の芭蕉記念館を建設、本年四月十九日その落成式の挙行をみた。

以来日曜日など数百人が来館している。

俳句をはじめとする文芸の会や芭蕉文学等研究に利用できる和室、洋室が設置され、それぞれ五十人用である。又芭蕉の真筆をはじめ俳諧資料を展示する展示室がある。さらに庭園は広くはないが、築山にミニサイズの草庵があり、古池の芭蕉の句碑があり、古池や滝が配置され、芭蕉の句にゆかりのある植物四十種類が植栽されている。俳句のメッカ、芭蕉文学発祥の地として、深川芭蕉庵の史跡を来訪される方々を楽しませている。

○ 季節の安居

安居は、夏の一定期間を学僧を集めて、外出を禁じ、講経や坐禅、念仏などを専念させることをいい、俳句の夏の季節として親しまれてきた。夏の安居に対して、冬の季節として冬安居がある。

季節としての安居は、夏安居、雨安居、夏、一夏、夏行、夏簀、夏勤、夏坐、一夏九旬、夏百日、百日の行などという。

又安居に入ることを夏入、夏の始といい、芭蕉先出の

句は、夏の始を季題とした句である。安居の終ることを結夏、結制、解夏、夏の終などといい、安居の期間を三つに分けて、前安居、中安居、後安居といい、いずれも俳句の季題である。解夏を自恣ともいう。

さらに安居にゆかりのある季題として、夏断、夏書、夏花、夏念仏がある。

○ 安居の句

安居を吟じた句は多い。

安居尼大きな寺を委されし
食堂も炷きこめられし安居かな
樗吹く風のさみしき安居かな
安居寺大竹藪に世を隔つ
目をつぶりみても雨見ゆる安居かな
安居すでに十日の雲を裁つ風や
雉子鳴いて安居に似たり夕日満つ
安居寺みやこの学徒来てをりぬ
夏安居の僧に寄りくる魂二つ

青 畝
爽 雨
古 郷
余 瓶
夜 半
三 汀
林 火
ま も る
豊 一 郎

安居はインドの雨期から始ったので雨安居という。

雨安居螺鈿の手篋くらさじ
雨安居の魚板の宙宇徹立てる
一山の松青々と雨安居
まつさをな雨が降るなり雨安居
沙羅の花庭を流るる雨安居

かけい
暁水
朝帆
左右
山彦

夏行の季題は、安居中に講経、坐禅、念仏などの行に専念するからである。

夏行とも又ただ日々の日課とも
船酔や夏行疲れもあるらしく
夏行僧白粥に塩落しけり

虚子
カツエ
伸哉

安居中は、一定期間、外出禁止となつて修行するから夏籠という。

夏籠りや小瘡煩ふ御僧たち

大魯



—夏安居の引声念仏：国宝『法然上人行状絵図』
第36巻，摂津の国勝尾寺における引声念仏法会
(法然上人は承元元年<1207>流罪が許されたが、
入京を許されず勝尾寺に四年留まられた)——

夏龍や種々に聞なす鐘の声
夏龍や仏刻まむ志こころざし

夏龍や月ひそやかに山の上

夏に籠る山六月の椿かな

額広うなりゆかん思ひ夏籠りぬ

夏に籠る木蘭色の袖長く

夏ごもりや首楞嚴経まだ知らず

安居は夏百日、一夏ともいう。

夏百日墨もゆがまぬころかな

熱飯に紅生姜夏百日来

真竹藪まともに一夏過しけり

安居に入るのを夏の始はじめという。

ててつぼう声が高いぞ夏の始め

山門に山羊やぎの仔あそぶ夏の始め

断水のつばやききに夏の始め

嘯山

子規

鬼城

六花

一碧楼

夜半

青畝

蕪村

澄雄

巨湫

一茶

宋淵

源義

安居の終るのを結夏けつげという。

雲くもふかく結夏の花の供養かな
天蓋てんがいに結夏の護摩ごまの火の粉かな

蛇笏
島人

○ 安居の由来

安居の意味は深い由来とながい伝承を持つ。安居は梵語 *varṣika* の訳、*varṣa* すなわち雨期に語源を持つ。インドの雨期はながく、雨期の三カ月は僧が遊行することが困難であるので、各所に集って修行勉強につとめることの意味である。

インドの雨期はながく激しい。衣具や用品を流され、悪疫毒蛇に遇うことが多いので、所定の場所に僧たちは集まり、罪を懺悔し、仏の教誡をうけ、仏道の修行、仏典の研究をし、安居が終ってから、全国遊行の旅を続けるのが習しであった。安居の期間は、四月十六日に始まり、七月十五日に終るのが原則であるが、別な期間をたてることもある。これはインドの気候風土の特殊性によるもので、インドでは仏教以前の諸宗教においても行わ

れてきたものである。

安居は釈迦成道ののち、母摩耶夫人のため初利天に登のぼって、一夏九旬の間、報恩経を説かれたのが最初といわれている。

安居の行事は、インドから西域、中国、日本へと伝わり、わが国においてもさかんとなり、俳句の季題にとり入れられた。

わが国に安居の仏教行事をとり入れられたことが「延喜式」にでていいる。天武天皇十三年（六八五）わが国の十五大寺において、四月十五日から七月十五日まで、経を分けて講説したとある。

延暦二十五年（八〇六）に十五大寺及び全国の国分寺に勅して安居を修することをすめられたとあり、以来主要な寺々において安居が修せられるようになった。安居の期間は、宗派によって異なる。

○ 冬安居

安居は夏ばかりでない。冬行われるのを冬安居又は雪安居という。これは西域地方の気候風土から発生したも

ので、西域では冬が厳しいからである。わが国も冬が厳しいので、冬安居がひろまり、十二月十六日から三月十五日までの九十日間を一般にいう。宗派によって異なる。浄土宗において伝宗伝戒道場（加行）が冬期間開催されてきているのは、冬安居の行事にゆかりを持っているからである。

灯の声をたのしむ冬の安居かな

薬石のばらばら飯や雪安居

冬葉

一杉

○ 夏念仏

『法然上人絵伝』の中に夏念仏の場面が数葉かかげてある。

手廻しに朝の間涼し夏念仏
月のさす松も持ちけり夏念仏

野坡

一茶

○ 夏断

寺で夏安居が行われる期間、信者は写経をしたり、禁酒、魚肉を断ったり、禁欲、精進することという。

瘦まじき身をも願ひの夏断かな

夏断して仏の瘦を思ひけり

夏断して百合の香骨に沁む思

規風

碧梧桐

五空

○ 夏書

夏安居期間中、信者が写経することをいう。

傾城の夏書やさしや仮の宿

月と日は男の手なる夏書きかな

味噌汁を喰はぬ娘の夏書きかな

其角

太抵

蕪村

○ 夏花

夏安居中、仏前に花を供えることをいう。

わざわざに蝶も来て舞ふ夏花かな

或時は谷深く折る夏花かな

一茶

虚子



宗教的情操を養う



滝 俊 立
たき しゅん りゅう

(東海高等学校校長
津島市阿弥陀寺住職)

先日、一卒業生の母から電話があった。このお母さんは、息子の在学当時、PTAや学校の集まりなどにはよく出席せられ、学級委員としてもよく活動をしていただいたので、今でもよく印象に残っている方で、子供は優秀な成績で卒業せられた教育熱心なインテリである。現在はグループの奥さん方と一緒に手芸を楽しんでいるとのことであった。息子さんも成長せられ、大学医学部を卒業、医道に精進していただける由であった。

その時の電話の用件が終ったあとで、その奥様は「最近は何にか心が落着かないので、仏教のお話でも聞かせて頂けないでしょうか。グループの方と皆で、聞く機会を期待していますから、何とかお願いいたします」ということであつたので、「それは誠に結構なことです。機会をみて実現しましょう」と電話を切った。



このお母さんの電話での話から種々なることを考えさせられた。今回は教育と宗教について何か書けという御下命であるが、結論としては、教育に宗教が根底としてなければならぬということである。

自分に子供が生まれると、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学と、お母さんの関心は自分の子供に集まり、子供のことで悩み、苦しみ、また喜び楽しんでいた間に二十年程も経ってしまい、息子は最終学歴の学校も終り、立派に成人し、未婚ではあったも、将来の職業の目標は既に決定し、立派な社会人の仲間に入る年代に至った。今までは、自分の子供の養育に全神経を労していたお母さんは、この頃には既に齢五十近くにもなって、頭髪に白髪がまじる頃になる。

夫は傍にあって、若い頃のようにには関心もなく、空気のようなもので、居っても無きが如く、今まで張つめていた氣力が急に失なわれた感じがする。

この頃にグループの面々と、手芸など習事に熱中するようになる。今まで張りつめてきた心境に比べて、いくらか心にゆとりを感じ、余暇の活用には、習いごと好適であるでしょう。しかし、人生航路も五十近くになると、心の透き間に風が吹く。一抹の不安、空虚さを感じる年頃である。だからこそ、仏教の話も聞きたいという言葉がグループの方々からも出てきたのだろう。

仏教の話に限らず、テレビ、ラジオの番組には、毎日のように、宗教について、著名な方々の放送があるが、余りに手近すぎ、今迄の生活リズムもあって、なかなか視聴する機会もないかも知れない。



概して、日本では若い人が寺院へ詣って説教を聴くことが少ない。寺は老人の出入する場所ぐらゐに考えられている。偶に寺に詣っても老人ばかりなので、場の違和感を覚えるだけである。自然若い人達は説教など聴く機会に恵まれない。特に都会の市中に住む人にとっては尚さらである。

子供を育てる若い年代にこそ、宗教的素養を身につけた母親が、家庭内に宗教的情操を養うよう躰にあたるべきである。「三つ子の魂百まで」という諺にもあるように、幼少の頃に教え込まれた躰は、一生その人の体内に残るものである。その躰がいつかの機会にその人の人柄を造る糧にもなると信ずる。幼少の頃、家庭内での躰は、一般に、社会生活に適応するために、年少時期に望ましい生活習慣を形成することであり、これを効果的に行なうには、一貫した愛情をもって発達段階に即した合理的賞罰によって行なう必要がある。幼ない子供には理論でなく、無条件に規範に従わせることである。

唐突に既成の宗派宗教を子供に強いるのではなく、日常すべての場面で父母を中心として、おのずから行なわれるものである。父母の敬虔な信仰態度は、おのずから子供を感化するものである。

宗教的情操の教育には、ただ人間は万物の霊長であるというような傲慢な考えを捨て、自らの至らぬ身の程を顧みて、神・仏等の絶対者の前に、己がひれ伏す心根がなければならぬ。

今日、物質文明の急激な発達の中にあって、失なわれゆきつつあるものは、こうした大いなるものの前に自己を放下する心根であろう。日常、宗教教育に当面する者の一人として、つくづくそうしたことを感ぜしめられることである。

(す)
(い)
(そ)
(う)

第二の人生への出発

なか じま しょう ねん
中 島 照 然

(福井県丸岡町白道寺住職)

今年の四月は私にとっては第二の人生ともいうべき月であった。間もなく七十に手が届こうという者が第二の人生等と大げさな事を言うのもおかましいことだが、私にとっては、老いの生き甲斐から人生最後のご奉公でもあるし、又こんな老ぼれでも使ってやろうとおっしゃって下さる方への報謝の気持ちもあって、第二の人生と言わせてもらったまでである。

私に第二の人生を与えて頂いたのは福井市の天池町にある仁愛女子短期大学の講師と、仁愛保育園の園長さんというのである。

どういう風の吹き廻しでこの仕事が私の所に廻って来たのかそれは知らない。最初にこの話が私の所に寄せられた時は、余りにも突然のことであったのでひどく驚嘆したものである。再三人を通じて学長からの招へいの言葉が伝えられて来た。その度にこんな私でも、最後の花を咲かせてやろうとの温情溢れる思召しにはこの上ない有難さを心に抱きながらも、私は容易に「諾」の回答を出すことが出来なかったのである。故意に返事を遅らせただけでもなかった。言うなれば私には寺族があるし、又三百軒余りのお檀家を背景にした白道寺の住職という

立場もあって、私一人の意志ではそう口で言う程に簡単に決めかねたことも理由の一つであった。それにもう一つ私が「諾」の回答をしぶった理由は、保育園の園長の仕事の他に、短期大学で「児童福祉」と「社会福祉」の二科目の講義を受け持ってはしいとの要望があったからである。現場を離れて十年余りの時間的経過の空白は、私に自信を失わせてしまっていたからである。この自信さえあればもう少し早く承諾の返事をしていたかも知れない。

招へいを受けて私は一早く寺族と檀徒の役員に事の次第を伝えて意見を求めた。意見を求めてみると、周囲の者達の反応は案外受諾賛成が多数であった。そしてひどく乗気であった。意見を総合してみると『折角と埋もれていたものを掘り起して下さって、使ってやろうとおっしゃるのだから、最後のご奉公と思って喜んでお役にたたせてもらわれたらどうですか。お寺のことは何んとかになりますよ』というのが九分通りであった。私が一番心配したことは日中寺を空けると月参り等の法務に支障を来たすということであった。その心配をかき消すように京都の本山（知恩院）勤めをしていたお弟子さん（先住の）

の一人が本山を辞して丸岡の自宅に帰って来たのである。運はその人について廻るというが、まさしくその通りになった。寺のこまごまとしたことはこのお弟子さんに頼むことになって一つ心配の種が消えたのである。そして講義の方も勉強をし直すということで、一応受諾の意を伝えることになり第二の人生に向けて出発する基礎作りが出来たのであった。頃は二月の末であったと記憶している。

四月一日学長から辞令の交付をうけた。普通なら定年退職をして孫の守りでもして余生を送る年頃なのに、よくぞこのような年寄りを使ってやろうとおっしゃる心の深さと、責任の重さを改めて痛感して学長室を辞した私であった。

四月六日に保育園の入園式が挙行された。私も新園長として出席した。さすがに保育園は設立者が浄土真宗の寺院であるせいか終始宗教的雰囲気の中で進められていった。仏の子供のメロデーが静かに流れる中に、開扉、献灯、献花、献香の順に式は進行していった。途中で園長の挨拶をと促されて簡単に祝辞と抱負等を述べて一応責任を果させて頂いた。ここで感激を新たにしたいこ

とは、幼い園児達が仏前であどけない紅葉のような手を合せて合掌礼拝する姿を目の当りにみて胸のつまる思いに誘われたことであつた。最近校内暴力が盛んに云々され、これに対して宗教情操の涵養の必要性が叫ばれている折柄、その基礎はここから造り出されるものではないかろうかとの思いを強くしたことであつた。

四月十四日から短大での講義が一斉に開講した。相憎というか、皮肉というか私は前日の十三日から悪性の風邪におかされてしまつて処女講は残念無念休講という結果になつてしまつたのである。風邪も癒えた二十一日に私は第一講を講じた。だから事実上の第一講は二十一日ということになる。第一講はその日の第一時限目であつた。短大では第一時限は朝礼から始まることになってゐるらしかったが、私はそのことを知らずに登壇したのである。朝礼のことは学長からも又教務課の誰からも聞いていなかったのがそもその失敗のもとだった。さつそつと登壇して開口一番開講の挨拶を發したところ、どこからともなく学生の失笑とも、にが笑いとも判別しかねるような笑いが私に向けられてゐることを私は覺つた。早速私は前列の学生に向つて「先生の顔に墨でもついて

いるかね」と尋ねてみた。するとその学生曰く「これから朝礼が始ります」と言いながら学生達は起立して合掌の形をとつていたのである。慌てて私も合掌したところどこからともなく学長と職員による「今日一日の慎み」の聖句が流れ、一同これを唱和して朝礼は終つたのであつた。この敬虔にして、真摯な学生達からは、およそ校内暴力等といったいまわしい行為は縁遠いものに違いないということを感じた第一目目の印象であつた。かくして第二の人生への出発が開始されたのである。願わくば第二の人生も日々の悔いのない充実した連続であつてほしいものと念じてゐるものである。

『浄土』誌の購読希望者のご紹介を、広くお願い申し上げます。いよいよ今月号より、年会費誌代を三〇〇〇円に値上げいたしました。お見限りになることなく、どうぞ末永く宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

〈随想〉

ほとけとの出会い (十二)

佐々木 隆三
ささき たけりゅう ぞう

(大正大学教授・医博)



進展的永遠における変化は、時間的永遠におけるような本質的な不変者に対する偶然的な変化ではなくて、存在の本質的な原理としての変化であります。これは本質的なものの自己展開であり、変化、発展が原理となっているのであります。したがって、これは明らかに回帰的なものへの対立であり、反逆であります。

回帰的な永遠が環であるならば、進展的な永遠は「空を飛ぶ矢」であります。しかしこの矢には速度はありません。(速度とは、動かざるものに対する相対的概念であり、動かないものを予想しなければ速度は考えられないのであります。)

この矢は飛んでおりますが、ただ方向しか持って

いないのであります。

このような存在の絶えざる自己発展の描く軌跡は勿論のうちにあります。その作用そのものは時間のうちにその位置はなく、そして、その発展の終点も時間の中に考えられず、かくして、このような発展の観念は永遠の観念を呼びおこすのであります。

このような一方向きの絶えざる発展は、いうまでもなく、フランスのいわゆる「進歩の観念」を先駆とし、十九世紀の思想を特徴づけるものであります。それは進化論の思想と歴史哲学を貫くものであり、このような考え方が生まれ発達する社会的基盤は、絶えざる変化をひきおこす資本主義的社会であります。

しばし耳を傾けてみましょう。

「自我は対立の架橋者である。

それ故に、自我は意識のおよび無意識的な精神の対立極の補償的共存存在および補償的共同作用の力の配分者であり、組織者であり、行政官である。

自我は人間的な衝動の一切の対立を社会化し、昇華し、個性化し、人間化する。自我は、精神の一切の対立極を架橋することができる橋である。自我は運命の車の複雑な、重複した軸であり、その極に精神的な対立する一対のものが付着している。

自我そのものは万能の神でもなければ、無力な人間でもない。自我は神と人間とをつなぐ結合であり、架け橋である。

自我は精神でも自然でもない。自我は精神と衝動との間にかけられた橋である。

自我は主体でも客体でもない。自我は主体と客体との間の媒介者である。

自我は機能の束でも特別な個々の機能でもない。

自我は個々の機能を束へと結びつける手である。

自我は男でも女でもない。自我はわれわれの中にある男と女との完全な両性存在である。

自我は意識の中核でも無意識の断片でもない。自我はその一つの極に意識が、他の極に無意識が付着している軸である。

自我は単なる覚醒だけでも夢だけでもない。覚醒と夢との間の橋である。

自我は此岸でも彼岸でもない。此岸と彼岸との間の橋である。」

思想は凝縮すると「詩」になるといわれますが、右のソンディの文章は一級品の詩であると思います。さて、再び主題の「時と永遠」の問題に帰って考察を続けることにしましょう。

まず第一に、わたくしたちの経験に現われる時間、具体的な体験の時間は、発展的な方向きの時間であることは認めざるを得ないと思われまふ。わたくしたち個人の体験に、そしてまた人間の歴史に、決して文字どおりのくりかえしのないことは、万人の承認するところがあります。

これに対して回帰的な時間は、具体的な体験を離れた抽象観念であることは明らかであります。これは現実を離れた可能性についての観念であります。

回帰的時間は、また観照的な受身の時間であり、一種の運命観（宿命）の傾向を含んでおり、主体を離れた客体的な時間であります。

バルトにおけるいわゆる「瞬間」は宗教的体験について導入された観念であると思われませんが、この観念は、一般的な体験に対して一般化することができると思います。わたくしたちの経験または意識の流れは一樣な連続的なものとは言えず、それは確かに一方向きの流れではありますが、その途中には特殊な瞬間が挿入されていることに気づくのです。

意識には確かに緊張度というものがあり、行為が障害に出遭わない限り、緊張度は低く、ほとんど無意識の状態ですしかし、ひとたび障害につき当り、或は新しい事態に突入するとき、わたくしたちは問題解決に迫られ、意識は緊張の頂点に達します。

このような瞬間は、「危機と解放の瞬間」であり、「運命決定の瞬間」であり、「新しい旅立ちの瞬間」

でもあります。

体験の時間は一方向きの時間、進展的時間であります。しかし、これは平坦な滑らかな連続的な進展ではありません。段階的進展であります。その段階をきざむものは瞬間であります。瞬間は時間ではなく時間と進展を生ぜしめるものであります。そして、瞬間と瞬間とをつなぐものは回帰的時間であると思われれます。

進展的時間、現実の時間は、その資料として回帰的時間を持ち、意味として瞬間をもつのであります。さらにまた現実の時間は、量として回帰的時間を持ち、質として瞬間をもつと言えるでしょう。

また、言葉をかえて表現するならば、回帰的時間は可能性を、瞬間は実現力を、進展的時間は現実性を表わすとも考えられます。

再び「仏教の時間論」にもどって「時と永遠」の関係について考察したいと思います。次回にゆずることにしましょう。

(つづく)



ホラ（法螺）

合 島 近
ごう じま ちかし
(電気タイムス社長)

私は、よくホラ（法螺）を吹く。ただし、なにごとによらず、というわけにはいかない。目下、ホラを吹く分野として、はっきり意識しているのは、碁とゴルフと唄（カラオケ）の三部門である。

このホラ吹き主義の実践は、碁に起因する。だんだん年配者と打つ機会が多くなり、なんべんか気まずい思いをした結果の知恵である。

町内に碁の愛好会ができたというので、早速出かけてみた。羽田近くの下町で、土着の人たちは、独特の大森なまりを交しているが、こっちは、ふだんの付き合いも

ないから、知らない人ばかりだ。

幾組かの熱戦を見まわすようにして、一人お年寄りが悠然と構えている。どうやら、この座では、名人格の人らしい。しばらく見物していたが、ほかに相手もないので、その名人に打ってもらうことにした。

「ひとつお願いできますか？」

「何段ですか？」

「いやあ、段なんてものではありません。まあ初段ぐらいでしようか。」

正直いうと、いくらか謙遜したつもりではある。結

局、私が三目置くことになった。

ところが、どうもぐあいが悪い。負けようがないのである。相手も相当のしたたかもので、いくら負けても手合いを変えようとしなない。だから、容赦なく大石を捕獲した。何番か打ち重ねるうちに、私が「ツエーなあ」といわれるようになってしまった。決して悪い気はしないが、名人の気持ちを見ると、楽しさも薄れる。

それでもこのような場所だから、まだいい。気まずさが、いまだに尾をひいていることがある。

有楽町に、私の関係する業界の諸先輩が集まるクラブがある。いずれも、相当の功成り名遂げたお歴々だ。ところが、碁のほうは、名譽の度合いが、著しく高い、ように思う。それほどとは知らないものだから、私は、自分のレベルを、いくぶん低目に申告した。そして、場所柄もわきまえず、もっぱら勝つ快感を優先させてしまった。

結果は、いけません。実は、自分でも感づいてはいたが、ごく懇意にしてもらう大御所に、はっきり指摘されて、ケシヨン。

考えてみると、自分の実力申告を低目に抑え、高段者

に勝つ場合、誰が一番いい気持ちになっているかと分析すると、ほかならぬ自分自身なのである。いや、自分一人だといっている。自分は謙遜のつもりでも、思わぬ罪つくりになりかねないように思う。だから、以来、私は大いにホラを吹くことにしている。

電電公社のOBに、Oさんというユーモラスな方がおられる。なんでも六段の免状をお持ちとか。この方と、ときどき「一番いくら」の取引きをさせてもらうが、Oさんは、私に、平気で二目置かれる。私が、いくらツに乗っても、ホラの限度は四段なのに、だ。それでいて、いつでも、どこでも、相変らず「私は六段」と臆面もなくおっしゃる。そんなOさんに、私は、えらいなあ、と感心してしまうのである。

ゴルフは、私は「天才」と自称している。「あんなもの若い者の遊びじゃない」と、ささやかな抵抗をして、満四十歳の誕生日から練習を始めた。集中的にやるから、当然、一時的には腕が上がる。運動神経の良否は関係ない、という説は、信じてよさそうだ。特訓の甲斐あって、半年で、ハーフ50が出るようになった。実のところ、「思わぬところに才能を見出した」と公言したくら

いである。

指導(?) してくれた先輩から、チヨコレートをたっぷり、それもしばしば頂戴したら、「君にとって、ゴルフとは何だね」と質問された。「遊び」と答えても承知しない。どうしても「出稼ぎ」といわせたいのである。

ところが、後がダメ。正式の授業料を惜んだタタリが歴然としてきた。「ウンチング・スタイル」「汲み取りのスタイル」「スマイリー・タゴサク」等々、珍評されるがままである。「よくそれで球が真っ直ぐ飛ぶな」というから、「天才だからよ」とやり返している。このごろは、諦感が進化したせいか、バンカーでも藪でも、みんな狙った所へ飛んだことにしている。キャディも心得えたもので、OB池へポチャンとやっても、「どうせ整理しようと思ってた球でしょ」と先を越されてしまう。

毎回五十人にのぼる某官庁のコンペに参加させてもらっているが、ひところは売れ行き上位だった馬券の対象など夢のまた夢。ベスト10はおろか、30位の関所も越え難い。「またスプーン(参加賞)だけだね」という娘の予想は、必ず当ることになっている。

だんだん回は重なるわけだから、そのうち50回賞かブ

ービーなら、当然もらうべくしてもらえないのではないかと楽しみにしている。

唄の場合も、自称する「天才」が、そのまま私のアダムにさえなっている。

唄といっても、小唄とか民謡とか、そんな高尚なものではない。いま流行のカラオケだ。カラオケというのは、ごま化すのに便利である。私の義姉は、「のど元までは、実にうまく唄えるんだが、口から外へ出たとたんに、調子が狂ってしまふ」というが、その点、傍でカラオケがブンチャカやってくれると助かる。ぐあいの悪いところは、かまわず省略して、アンチヨコを見ながら、ときどき声を出すだけでも、なんとかおさまりがつく。すくなくとも進行に関しては、支障をきたさないことになっている。

この道は、採点の基準がないから、まことに都合がよい。みんな自分が一番うまいと思ってるそうだから、おめでたい話だ。飲み屋などに行くと、よくいくつかのポイントを指摘してくれるご仁に出くわす。もっともらしく説明するほうも、「てめえは、たいしてうまくもないくせに」と思いながら、フンフンとうなづいているほう

も、同類のおめでた族なのである。

宴会などに出ると、指名されても、きまって尻ごみする人がいる。ほんとにへタな人の気持ちは、わからんでもないが、結構うまいくせにもったいぶられると、座がシラケル。

だいたい、素人のくせに、じょうずに唄わなければならないなどという気持ちが邪魔だと思う。むしろ、調子っぱずれのほうが、よっぽど愛嬌があつておもしろい。へたくそなくせに、とめどなく唄おうとするから嫌がられるのだ。

やはり電電公社のご出身で、Tさんという方がおられ、一夕、その方の名調子を拝聴する機会に恵まれた。「そろそろ唄でも」と、座敷の女性に促されると、さつと手を上げて、「おれが○○節をやろう」と、ご自分の姓と同名の民謡を演じ（唄うとは表現しにくい）られた。

最初っから、三味線など眼中にない。あっちこっちへフシが飛ぶ。普通、リズムぐらい存在するものだが、それもあるやしい。義妹の有名な女優さんが、随想の中で、「腹がよじれる」と評されていたが、私も、腹の皮が痛くなった。無毛の額に、汗をにじませてうなられるその

芸は、まったくもって見上げたものと申し上げざるを得ない。

新橋のある飲み屋に、紺がすりを着た小娘がいる。まだ二十歳前に見えるのは、小柄でかわいい顔をしているせいかも知れぬ。

この娘が、これがまた、とんでもないひねくれ節である。いまだきの若者には、珍しい貴重な存在といえよう。そして本人は、なにかおかしいのかとすましたもの。さんざんせがまれて、やっと一つきかせてくれるお師匠さんの唄よりはるかに魅力がある。

さて、これからホラの分野を、どう広げるからだ。ゴーゴーなら、すぐ名人の域に達するような気する。ダンスは——、ダンスはだめだ。だいたい、男女が抱き合う（？）状態になるのは、よっぽどの仲であるべきだと思ふのは、気が小さいせいだろうか。あるいは邪心が多過ぎるせいかも知れぬ。

とにかく、遊びでも仕事でも（順序に注）、楽しくやるのが私の主義だ。よく人様から、「あなたは幸せそうですね」といわれるが、自分でも、ほんとに幸せだと思っている。

浄土句集

一田牛畝選

大寒やびたり動かぬ鯉の影

東京 真野 竜

評 寒鯉は餌も求めず一所に集ってびたりと動かないのである。大寒を嫌うのは人間ばかりでなく森羅万象すべてだ。

住職の賀状やさしき舞妓の絵

東京 栗原とも子

評 住職よりの賀状は毛筆で厳格な文字が綴られていると思っていたら舞妓の絵とは。隠気さを払い除いて一家中嗟ぞかし明朗な年酒なりしならん。

花人の一礼し行く忠霊塔

福岡 高良 慈風

評 忠霊塔のあるところは村の小高い丘の上でその周りには桜が植えられ、それが花の名所となっているのである。花見人はそこを一礼して、敷かれたる花筵について唄い踊って賑うのである。

初雛を贈る吾が身の少し老い

福岡 権藤みきを

評 若い若いと思っていれば、早子供達は結婚するのである。結婚すれば孫が出来るのである。女の孫なら雛、男の孫なら鎧甲と、お金はいくらあっても足らぬもので、いつの間にか年取っている。

古稀過ぎし弟子を招きて春の茶事

東京 栗原やえ子

評 長い間茶の宗匠らしい。古稀過ぎし弟子なれば、嗟ぞ皆達人ばかりならん。

猫描かれありて有名涅槃像

京都 安藤 寛

眼をあくも閉じるも在す涅槃像

福岡 安藤平次郎

踏青や野地蔵在すところまで

福岡 上滝津弥音

呼びとめてお布施まいらす寒念仏

福岡 服部 光代

花吹雪山門くぐる稚児の列

東京 細田 初枝

年を経し山門の屋根雪重く

福岡 田中 快郷

春愁や今日も聞かざる愚痴話

福岡 荒牧 還愚

福岡 荒牧 亀齡
御仏にまかせし体春の風邪

東京 真野よし子
子等遊ぶ小さき日溜り犬ふぐり

山口 三井 寛静
豆腐切る霜冷厳し厨窓

福岡 稲永 新
嘲や生涯悔いず終りたし

東京 末常てる子
寒天に樺高々そそり立つ

三重 森 静枝
寒雀不図さわがしくとも思ふ

福岡 高良 幸代
日を劔^はねて辛夷^{こし}かがやく丘の上

東京 田中 秀代
広々と枯野の果の夕茜

山梨 青山富貴江
ようやくに木蓮つけし花六つ

山形 松田 允子
春泥の靴一列に堂の前

東京 阪入志津枝
めぐり来るクラス会なり春を待つ

福岡 永江 隆説
飛び立つを待つ機窓より花の山

群馬 沼津 か寿
残雪にあけの明星かがやけり

東京 鈴木 葉子
立春や雲ゆつたりと丸の内

大分 丹羽 難中
詠讃歌流るる花の御本山

東京 猪瀬 幸子
耳^{みみ}しひの声の大きく鬼やらひ

三重 山田 うた
奥飛騨の詩^{うた}もせつなく春の宵

福岡 前田 秀峰
風花や仰いで礼す祖師の廟

東京 鳥居 千代
切餅^{むぎ}に銚^{ちやう}のあとのほは笑まし

山形 松田 光蒼
野仏の春泥浴びて笑み在す

福岡 行正 明弘
座布団を積み上げ彼岸果てにけり

東京 小笠原香祥
紅白の幸福遠磨初不動

山口 上野 明達
花御堂天上天下唯我尊

一田 牛畝
苔の花掃除第一住持訓

表紙のことば

「雨の季節」

土屋 正男

六月は入梅。梅雨に咲く花々は藤、卯の花、アザミ、アジサイ。なかでもアジサイは梅雨のしとどに降るさなか、紫の花冠を憂鬱しさに傾けている風情は雨の季節を代表する花といへよう。

長期予報によると今年の梅雨は例年よりも早く入り遅くまで続くということで、農家の

人達にとってこれは喜ばしいことなのだろうかどうだろうか。異常気象とやらで、ひと夏も雨が降りつづいたら農家も心配のことだろう。農家の仕事については全然の素人でもわからないが、作物の生長には高温多湿、雨が降っては陽が差し、また雨が降るのがよいので、降ってばかりではやはりよくないと聞

いた。どうかそうあって欲しくたいものである。

汽車の窓から雨に煙る早苗田の農人を風景中の一点景とながめて六月の詩情をうたい、汽車を降りて雨の中に立って六月の無情をうらむのが多くの我々の心情である。それでも近頃は生産者対消費者の立場から我々も多少は天気を気にするようになった。天候が悪く収穫が少いとそれは直ちに米価に影響する。なんでも物流に頼っている消費者はすべて他人まかせなのである。雨がなくても米価は昇る。電力が落ちる、水道が止まる。雨ばかり降っていても米は不収獲となる、鉄道屋が悲鳴を挙げる、傘屋が泣く。

雨が降って傘屋が泣くというのは、どこ

家にも傘の一本や二本は備えてあるものだが出先などで急に雨に降り出されて困ってこそ傘は売れるので、雨の降り続く時ははじめから傘を用意して出かけるから、傘は売れないのだと聞いた。だからカッパが長雨をうらむのも、雨が降ればきうりの味も落ちるし、水遊びの子供も集ってこない。したがってシリゴダマを狙うこともできないという訳である。

時によりすぎれば民のなげきなり

八大竜王雨やめたまへ

実朝

長雨もどうか、ほどほどに願いたい。

詩

詩

詩

六月の花

清^{きよ}
川^{かわ}
宗^{そう}
治^じ

六月の花はアジサイ

アジサイは七変化――

七色にも移ろい変るきらびやか

その様変りの変転に

そほ降る雨さえおどろくばかり

――しつとりと咲き染めるアジサイの花

六月の花はアジサイ

アジサイに時の無聊を慰められて

雨降る中にひとり漂う

しみわたる思い

心の広く深くしつとりと休らぐ

◆◆◆ “浄土句集”欄への投句のお願い

— 及び俳文等の寄稿のお願い ◆◆◆

『浄土』誌本文中のオアシスともいうべき、“浄土句集”欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生
の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に
富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させ
ていただきます。

さて、この“浄土句集欄”へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことを願
いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに
衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しく願います。

- 一、内 容 俳文、句会便り等の随想
- 一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度
- 一、締 切 毎月五日

法然上人鑽仰会



—大泉河と三危山—

敦煌にて

江のめ達雄
目達雄

(山形市迎接寺住職)

三危山

大泉河を渡ると、砂漠の中とはとても思えない、うっそうとした樹林であった。十月なかばに近く、樹葉はわずかに色づきはじめている。

酒泉空港から玉門鎮、安西と、ゴビの町を通過してきたが、そこで見た高い樹木は、たいていはポプラのようであった。しかし、ここの林にはいろいろな広葉樹が入りまじり、いずれも堂々たる大木をなしている。木の下には灌木や野草まで、生え茂っている。シルクロードの旅人たちにとって、この大泉河のオアシスは、まさしく聖域、別天地として眼に映ったことであろう。

その樹林の一角がひらけて広場があり、大きな朱塗りの楼門が立っていた。「莫高窟」と縦に書かれた扁額の下に、大きく横に「石室宝蔵」と書いてある。門をくぐって振り返ると、その反対側に「三危樓勝」と、悠揚た



—莫高窟のオアシス—

る文字がしるされている。

三危とは三危山のこと、その山の景観を一望におさめる、という意味である。

三つの危険をもつから三危山と名づけられたところであるが、莫高窟のある鳴沙山と、大泉河を隔てて向いあつている山稜である。鳴沙山の白い砂丘のような起伏に対し、黄褐色の、除阻な裸の山だ。

ゴビの索漠とした彼方に、この鋸の歯のような山容を望んだときは、いかにもきびしく、荒涼としていた。しかし、その荒涼とした風光が、あやしく心をゆさぶり、辺境の旅の実感を深めるようであった。

第十七窟藏経洞

莫高窟では、わずか一日半の間に、七十余窟をめぐるという、随分と慌しい日程であった。木立から日ざしの洩れる歩廊を、石窟から石窟へ、順礼のように歩いた。しかし、この石窟順礼は、時間の不足をしきりに気にしながらも、なかなか楽しかった。

石窟は、年代的に順序よく並んでいるというものは、勿論なかった。したがって私たちの石窟めぐりも、

古い時代の窟から新しい時代の窟へ順を追って、というわけにはいかなかった。年代的には順序不同に、つぎつぎに歩いた。

そして最初に案内されたのが、小説『敦煌』にも登場する第十七窟藏経洞であった。

一九〇〇年の頃、莫高窟に住みついてた王円録という道士が、たまたま、壁の向うに大量の写本が封じ込められているのを発見し、一九〇七年三月には、この話を耳にしたイギリスの考古学者スタインがやってきて、いくばくかの銀と引換えに、王道士から大量の文物を入手した。ついで翌年二月には、こんどはフランスの東洋学者ペリオが現われ、またまた大量の文物を持ち去った。こうして、砂に埋もれていた敦煌・莫高窟は、一転、世界の耳目を集めるにいたったのである。

いわば敦煌の新しい歴史を開いた第十七窟は、考えていたよりもかなり狭い窟であった。第十六窟への通路の横につくられており、耳洞と呼ばれるのだそうである。

窟の正面の壁の、向って左には杖をもつ侍女、右には扇をかざす比丘尼が描がかれ、その間に僧の像があった。帰義軍節度使張議潮の厚い信頼のうけ、唐朝から

は、都僧統という最高の位を贈られた、敦煌仏教の高僧洪誓の像である。

洪誓の像がここに置かれたのは、まだ新しいことのようにであった。もともとこの窟は、洪誓の像を安置する仏洞であったが、藏経洞として封印する時点で、像を他に移してしまったのではなかったか、こう推定され、近年になつてもとに戻したといういきさつである。洪誓の像は、第十七窟のまきおこした波瀾には、なんの関わりもないかのように静かに坐していた。

交脚弥勒菩薩

駆け足の石窟めぐりであったが、それでもいくつかの仏像や壁画の印象は、忘れることができない。

盛唐の繁栄をしめすかのような巨大な弥勒大仏、長安の美女を思わせる脇侍菩薩、いつもきびしい顔をしている迦葉尊者と、いつも美青年である阿難尊者。

天井に軽やかに舞う飛天と、丹念に刻明に描かれた千仏。濃い朱の隈取りと白のハイライトで強調された、本生物語の主役たち、そして、壁面いっぱい展開する荘厳華麗な観無量寿経变相図……。



—敦煌・莫高窟—

こうした中でも、二七五窟の交脚弥勒菩薩の印象はとくに強かった。

二七五窟は、北凉(四二一—四三九)の造営と推定され、現存四九二窟中最古のものとされている。

像高三・四メートルの、大きな弥勒菩薩は、この窟のまん中に、奇妙な顔の獅子を両脇に従えて、悠然と坐しておられた。

仰いでいると、しみじみとあたたかいものが伝わってくるような、おらかな仏である。

上半身は裸で、首から胸に瓔珞を飾っている。腰には裾をまとい、両脚は足首のあたりで×型に交脚している。手は施無畏印をしめすが、左手の指が無残にも壊れていた。頭には化仏のある宝冠をいただき、眼は見開いている。

西域の影響を濃厚にうけた様式であるが、顔の造形には中国伝来の俑の技法が見られるという。そういえば、秦の始皇帝陵の出土品で見た武人俑に、似通うものがあるようにも思えた。

弥勒菩薩といえど、どうしても思い起すのが、太秦広隆寺の宝冠弥勒菩薩である。神秘的微笑をたたえた、深

い思索に沈むかのような半跏思惟像。端正な、清らかな、美しい仏像である。

ところで広隆寺の弥勒菩薩と、莫高窟の交脚弥勒菩薩は、同じみ仏の像でありながら、余りにもイメージがちがうのである。広隆寺の弥勒菩薩の鋭利繊細な造形、これに対し、交脚弥勒菩薩の、例えばその指先の損傷など少しも苦にならないような、天衣無縫のお姿。

弥勒菩薩は、五十六億七千万年の遙かな未来に、兜率天よりこの閻浮提に下生し、竜樹下に成仏して衆生を救済する、一生補処の菩薩、未来の仏といわれる。しかし、交脚弥勒菩薩は、いま現にこの世にましまして、衆生のもろもろの願いに身を傾ける、現世の仏様のお姿のように思えてくるのである。

流沙の聖地

敦煌・莫高窟は、その盛んな時は、一千の仏窟を数えたという。およそ四世紀から十四世紀まで約一千年の間、大泉河に臨む鳴沙山の断崖に、夥しい仏窟を開いたのである。

敦煌のまちの人も、砂漠の村々の人も、機会を求めて

は莫高窟に足をはこび、仏窟を願拜し、壁画の前では僧たちの説くその物語に、耳を傾けたことであらう。シルクロードの旅人たちも、大泉河のオアシスに駱駝を休め、莫高窟に旅の安全を祈願するのをならわしとしたのかも知れない。

新しい石窟が開かれたときは、盛んな開眼供養の法会が、営まれたであらう。この日を待ち望んだ村々の人たちは、仕事を休めて莫高窟に集り、大泉河のオアシスはいく日にも亘って賑わいを呈したことだろう。

敦煌はシルクロードの要衝として栄え、経済力も豊かであった。敦煌の支配者は、永い歴史の間にいくたびも交替したが、しかし、いづれも熱心な仏教の信奉者であった。仏教を信ずる心の厚い支配者や住民たちによって、莫高窟は賑わい、その賑わいがまた、敦煌の繁栄をうながしたのかもしれない。

砂に埋れた敦煌・莫高窟は、いまは、世界的な仏教美術の宝庫として、国家的な手厚い保存がすすんでいる。しかし、流沙の聖地として、再び賑わう日はくるのだろうか。



念佛ひじり三国志

(十五)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

尼將軍——北条政子が京都へ姿を現したのは、承久ノ
變直前の建保六年（一二二八）二月、卿二位兼子の画策に
よったもの以外に一度だけある。承久二年（一二〇八）十
月だった。

「吾妻鏡」の記事によると、十月十日の項で「尼御台
所、御宿願ヲ果サンガタメニ熊野山ニ御参。今朝卯ノ尅、
進發セシメ給フ。武蔵守（時房）扈從ス。同二十七日御入

洛ナリ」と書かれている。鎌倉へ帰ったのは同じ年の十
二月二十日「尼御台所、熊野山ヨリ御還向」とある。

武蔵守時房は政子の実弟で、北条政權樹立時における
かげの功労者である。例の將軍実朝暗殺のあと、卿二位
兼子が育てた後鳥羽院の親王を將軍の後継者として送り
こむ話が流れたとき、自ら京都へ乗りこんでゆき九条兼
実の曹孫（良経——道家——頼経）を迎え入れるべく交渉をま
めてきた人物である。

時房は、政子や義時が死んだあと甥の泰時を後見して
執權職の強化をはかった篤実な男である。晩年は、相

州」とも「匠作」とも呼ばれて鎌倉武士の信頼を一身に集めた。

ところで承元二年の政子上洛は何を目的としたのであろうか。

「御宿願ヲ果サンガタメニ……」とあるから亡夫頼朝や平家の怨霊を鎮めるための熊野参詣であろう。これらの怨霊がタタってわが子実朝の病身（この年痼瘡を病んでいる）がちである不吉な翳を払拭したかったか。

その目的もあったにはちがいない。しかし後鳥羽体制が「鎌倉調伏」を尊長らの近臣聖職者に祈禱させていたまっただなかへ純粹な参詣だけを目的として尼將軍が乗りこんでいったとは思われない。いわんや従者は執權義時の片腕である五郎時房だ。熊野参詣に名をかりた洛中における軍事力の強化だったことは充分に考えられる。尼將軍の鎌倉出発と前後して鎌倉武士が続々と入京したのではないだろうか。

承元二年と言えば、法然が流罪の難に遇ったり、その門弟の安楽や住蓮が処刑された翌年にあたる。

この事件をきっかけとして、いや、それをねらって事件を捏造し、後鳥羽院政は洛中を戒厳令下へ持ちこんだ

気配がある。都の実情を把握するために鎌倉は有力な御家人を送りこんでいる。

実状の把握に「専修念仏者の断庄」も重要な事項だったのではなからうか。「吾妻鏡」は承元二年の四月二十七日に「東平太重胤上洛ス。コレ父胤頼ハ弱冠ノ当初本所ニ候ズ。ソノ例ニ任セテ片時ナリトモ上日奉公ノ名ニツクベトノ由、懇望ヲ致スノ間、挙シ申サルルにヨツテナリ」とある。大意は京都の事情には詳しいつもりだから、という本人の申し出によって派遣されたのだという。

東平太重胤は千葉氏、頼朝の挙兵に多大な貢献を果たした関東大豪族の出自だ。その父胤頼は若いときから京都勤番、上西門院に仕えた。文覚上人とも親交があった、平家追討の旗上げに直接かわっている。

源頼政の宇治の旗上げ、以仁王の意向を関東へもたらしたのもこの胤頼で、治承四年の六月二十七日の「吾妻鏡」は、彼が三浦義澄と同道して北条の館を訪れた模様を書いている。

源三位頼政や以仁王の叛乱をつぶさに頼朝へ報告する。「武衛（頼朝）件ノ兩人ニ対面シ給ウ御閑談ニ刻ヲ移ス。他人コレヲ聞カズ」と「密議」を匂わせている。平

＜尼將軍政子—ありし日の頼朝と若き日の政子＞



家の目代山木判官を襲撃したのは、このあと一カ月足らずだった。

ところでこの千葉胤頼は、建久元年（一一九〇）の秋、京の清水寺で法然の説戒を受けて念仏門へ帰依した左衛門入道法阿その人であった。宇都宮頼綱ら共々に入信している。

建久十年の十月末、梶原景時の弾劾をふくんで頼朝追善の一万遍唱名念仏を有力御家人たちが勤めたが、その筆頭に千葉の兄弟たちの名がある。

重胤には伯父にあたる下総の相馬御厨の領主千葉師常は、元久二年（一二〇五）十一月十五日六十七歳で死んでいる。「吾妻鏡」は、

相馬次郎師常卒ス、端坐合掌セシメ、サラニ動揺セズ。決定往生アエテソノ疑イナシ。コレ念仏ノ行者ナリ。結縁ト称シテ、緇素（しそ）コゾリテ集リコレヲ拝ス

と紹介する。入道法阿（胤頼）と言い、兄の師常と言いい、千葉一族が法然念仏の帰依者だった事実はまだしも

ないそして、東平太の重胤が念仏ひじりたちと交友関係があったであろうこともまた推測できる。推測であって具体的資料はない。ただこの京都の実状報告で重胤もたらした事実が、その裏付けとなりそうである。

やはり「吾妻鏡」を参照にする。同じ承元二年の十月二十一日に京都から帰着した。おそらく東海道で北条政子と落ち合ったであろう。

スナワチ御所ヲ召サレ洛中ノ事ナドヲ申ス。マズ熊谷二郎直実入道、九月十四日未ノ刻ヲ以テ終焉ノ期タルベキ由アイ触ルルノ間、当日ニ至リテ、結縁ノ道俗、カノ東山ノ草庵ヲ囲繞ス。時尅ニ衣袈裟ヲ著シ礼盤ニ昇リテ端坐合掌シ、高声ニ念仏ヲ唱エス終リテ執ル。カネテイササカモ病氣ナシト云々

京都の実情偵察にしては、熊谷蓮生房の上品往生の報告は意外感があるが、それだけに「念仏者迫害」への実情調査の匂いが強い。熊谷はすでにこの往生を予告していたのである。「熊谷小次郎直家（直実の子）上洛ス。コ

レ父入道、来ル十四日、東山の麓ニオイテ終リヲ執ルベキノ由、示シ下スノ間、コレヲ見訪ハンガタメト云々。進発ノ後、コノ事ヲ御所中ニ披露ス。珍事ノ由、ソノ沙汰アリ。然ルニ広元朝臣云ハク、カネテ死期ヲ知ルコト、権化ニ非ズンバ疑イアルニ似タリトイエドモ、カノ入道、世塵ヲ遁ルルノ後、浄土ヲ欣求シ所願堅固ニシテ、念仏修行ノ薰修ヲ積ム。仰ギテ信ズベキカト云々」と「吾妻鏡」にある。九月早々熊谷直家は一族郎党を引きつれて大挙上洛しているのである。

熊谷蓮生房の「上品上生ノ往生」を法然の諸伝（四十巻伝）及び「九巻伝」は、「吾妻鏡」よりも一年ほど前のこととしている。建永元年の八月に故郷武蔵国村岡の市に高札を立てさせ、来年二月八日に「往生スベシ」と予告したのである。だがその日、おびたしい善男善女が参集したにもかかわらず「今日ノ往生ハ延引スベシ」と中止してしまった。阿弥陀仏の来迎は九月四日に変更したのだ、と宣告した。参集の人々は「嘲ケリヲナシテ婦リヌ」だったという。

だが、その九月四日、衆人が見守るなかで「礼盤ニ登リ、瑞坐合掌シテ高声念仏熾盛ニシテ已刻ニ念仏ト共ニ

息トドマル時、口ヨリ少光ヲ放ツテ長サ五六寸ナリ」と、見事に往生を遂げたのである。

建永元年九月四日、と言えば法然流罪の半年前にあたる。しかもこれらの法然伝は自絶往生の場所を武蔵国の熊谷としている。その遺言が京都の聖覚法印のもとへ送られた。

時間と場所になぜこうも差異が生じたのであろうか。

二

どちらが正しいのか。やはり「吾妻鏡」の記事に軍配をあげねばならない。法然伝は唱導の文章だし、「吾妻鏡」は記録が主体である。いわんや父直実の往生に立ち会うために息子の直家が上洛したという具体的な行動まで紹介している。「九条九代記」は「吾妻鏡」のこの記事を忠実になぞりながら、あわせて先に念仏往生を遂げた相馬次郎（千葉師常）にもふれる。

ではなぜ法然伝は場所と時間をずらしたのであろうか。

これはあくまで推察であるが、事件後一年そこそこの

承元二年九月ではあり得ない、とする情勢判断が働いたのではないだろうか。

その情勢判断とは？

安業や住蓮らの有力門弟を処刑し、師の法然まで四国へ流罪追放。洛中での念仏布教をきびしく禁じていたのである。そのまっただなかで専修念仏のデモンストレーションにも似た熊谷直実の自絶往生——あり得ぬことではないか。

時間を断行行使の半年前へさかのぼらせ、場所も京都から武州へ移した、と考えられる。

これは法然伝の成立とも密接に関連してくる。さきにふれたようにこの熊谷往生記を掲載しているのは「四十八巻伝」と「九巻伝」である。しかも出典は「九巻伝」がより強力だったと推断できる。理由はこの伝記の作者が聖覚法印ないしはその遺弟によったものだからである。

熊谷の往生相はその遺言などによって聖覚法印へもたらされた、とは両伝に共通した記載である。

聖覚自身が、この自絶往生は建永法難の以前、場所も武州であつたろう、と判断したにちがいない。なぜなら法難当時、聖覚は宮廷内外で活動し、念仏禁断のきびし

さを誰よりも知りつくしていたはずだからである。

だが事実は、禁制下の洛中で白昼堂々と、それも東山黒谷に道俗男女を多数集めておこなわれたのである。朝意にそむくばかりか、さきの法然上人らに加えた断行暴挙への抗議の性格すら濃厚であった。もちろん直実本人は真剣に阿弥陀仏の来迎による上品上生の往生を信じたのであろうが。

後鳥羽院及びその隸属権力は、なぜこれを黙視したのか。辻に高札を立てて触れまわったのである。この事実を知らないはずはない。

鎌倉武士たちの上洛だ。無言の圧力をかけていたにちがいない。父直実の往生儀を「見訪ラハンガタメニ」家の子郎党を引きつれての入京だったにちがいない。これよりわずかにへだてて尼将軍政子までが西上していた。弟の五郎時房の同道は、多人数の武士団が警固してきたのであろう。

政子は鎌倉を出発する直前、永福寺の阿弥陀堂で二十五常行三昧の念仏行を修した、と「吾妻鏡」を書いている。将軍実朝も一緒だった。

しかし、政子上洛の目的は後鳥羽院及びその周辺で高

まってきた倒幕意慾への牽制が本旨だったことも疑う余地がない。念仏禁断とそれにとまらぬ抗議行動——熊谷往生もこの権力の闘いにおけるほんの一翼にすぎなかったであろう。

たしかに後鳥羽院の倒幕意慾はこの承元二年をむかえていよいよ露骨になってきた。すなわち三月、住吉社の歌合で、

奥山のおどが下もふみわけて

道ある世ぞと人に知らせん

その決意を詠んでいる。

まかり間違えば速戦速決ぐらいの決断とともに北条政子は上洛しようである。だからその行動はすべて隠密裡で、然るべき公卿や高官の者に会った気配は全くない。熊野参詣に名をかりて、畿内武士団のテコ入れをやって歩いたのであろう。

ところで熊谷二郎直実入道の往生を報じた東平太重胤はこれに続いて興味深い事実を鎌倉へ報じている。同じ「吾妻鏡」の記述だ。

次ニ去月（九月）二十七日ノ夜半、朱雀門焼亡ス。

常陸介朝俊、松明ヲ取リテ門ニ昇リ、鳩ノ子ヲ取リテ歸リ去ルノ間、クダンノ火コノ災ヲナス。オヨソ近年天子、上皇コトゴトク鳩ヲ好マシメ給フ。長房、保教等モトヨリ鳩ヲ養フ。時ヲ得テ殊ニ奔走スト云々。カノ門の焼亡ニヨツテ、去ヌル五日ノ射場始延引スト云々

文章の外面は天子や上皇か鳩を好んで、大内裏で飼育するものだから、その鳩の子を追って松明の炎が朱雀門に燃えうつり、焼いてしまった、という報告だけである。だがこの鳩が曲者で、天子や上皇の反幕府志向を象徴したつもりなのであろう。

同じ朱雀門焼亡の記事を藤原定家も「明月記」で同一の筆法で書く。

九月二十八日（承元二年）常陸介朝俊（朝隆卿ノ末孫ニ生マル。只、弓馬相撲ヲ以テ芸トナス。殊ニ近臣ナリ）松明ヲ取リ、門ニ昇リテ鳩ヲ取ル。歸リ去ル

ノ間、件ノ火コノ災ヲ成ス。近年、天子・上皇、皆鳩ヲ好ミ給フ。長房卿ヲ本ヨリ鳩ヲ養フ。時ヲ得テ馳走ス。旧塔鐘樓ニ登リテ鳩ヲ求メ取ル。此ノ事、遂ニ以テ社稷ヲ滅ス。嗟乎悲シキ哉、例ノ幣日、大宮大路ヲ見ルニ只灰燼ノ跡有リ。人家無し。京洛ノ磨滅、尤モ奇驚スベキコトナリ。是レ又、鳩ノ一事ニアラズ。只国家ノ衰微カ

定家は慎重な態度でこの日記を書いている。ひしひしと迫ってくる公武の対立、とりわけ後鳥羽院の暴走を、鳩を好む趣向にかまけて「只国家ノ衰微カ」と憂慮し、かつ恐れるのである。それにしても「吾妻鏡」と「明月記」が申し合わせたように朱雀門の焼亡——この不吉な災難を「鳩害」のせいに行っているのも面白い。「近年天子、上皇コトゴトク鳩ヲ好マシメ給フ」と非難めかしく書く。

見解の統一はおそらく鎌倉の謀者東平太重胤が朱雀門焼亡の情報源を藤原定家あたりに求めたからであろう。定家の風懷をそのまま鎌倉將軍へ報告したにちがいない。

では鳩は何の象徴であるか。

この国の宮廷伝説では八幡宮の神使である。石清水八幡宮の石燈籠の内、宝珠が鳩の形をしていたという東夷征伐でこの社で祈願したら、白絹をくわえた白鳩が奥殿から飛び立ってとも伝えられる。遠く三韓遠征に出発する神功皇后が、生み落した嬰兒を地に埋めてゆかれた。凱旋後同じ地点を弓で掘りおこしたら土鳩の母子が棲息していた——武運長久の伝説がそこから由来した。

「天子、上皇鳩ヲ好マシメ給ウ」こそは東夷征伐、鎌倉武権の調伏を象徴したにちがいない。

そんなまっただなかへ尼將軍北条政子は乗りこんでいったのである。しかも熊谷入道は禁圧直後の東山で、公然と専修念仏義による自絶往生を断行したのである。

東西手切れの触発機。鳩を取るために朱雀門楼上へ登った常陸介朝俊——武勇に富んだ男で後鳥羽院の「殊ニ近臣」が松明の炎で朱雀門を焼いたという事実こそ、この承元二年の危機感を物語るであろう。

いや、こうのような危機相が後続しただけに建永二年初頭の専修一向ノ徒の断圧がどんな性格をふくんでいたかを、明白に裏付けている。

話を、その建永二年の初頭へ引き戻そう。岡崎の卿二位兼子の屋敷である。兼子の夫、大相国頼実をもまじえて、明遍との会話はなお続いている。

大相国頼実は、その父左大臣経宗のことを語りだした。

「阿波大臣は平生あまり信心深い人ではなかった。晩年になり病いを得てもいっこうに仏法へ関心をお示しにならない。こんなことで正しい往生が遂げられるであろうか、と私の母などはずいぶん心配された。いろいろな人に相談を持ちかけた。その結果、比叡山からおえらい阿闍梨に来て頂くことにした。このお方の説法をそれとなく聞かせてみよう、ということになった。病床と屏風をへだてて、阿闍梨にお話をして頂くのである。そのお話相手に、街のひじりを頼んだ。われわれも縁先に控えて、聞かせて頂いたが、たいへん感動的なお話だった。阿闍梨は仏法の神髄を余すところなく語りつくされた」

「それで、二位ノ中将さまは？」

兼子は膝を乗り出すようにして、訊いた。

「それが面白いではないか。左府は阿闍梨たちが帰られたあと、ひどく悦ばれたが、明日は今日あまりしゃべらなかつた僧に来て頂こう、とおっしゃったのだ」

「しゃべらなかつた僧——」

「阿闍梨のお相手をした街のひじりこと」

「阿闍梨さまではなくて……なぜでしょうか」

聞き上手な兼子は声をはずませる。

「左府がおっしゃるには、えらい阿闍梨はもはやご自分のたくわえているものをすべて吐き出してしまわれたであろう。その点、あちらのひじりは未だ何も語っていない。わしはそれが聞きたい。きつと深い知識やゆるぎない信心をたくわえたお方にちがいない、とおっしゃるのだ」

「それで——」

「街のひじりには、それ以後毎日来て頂いた。ことに左府が息を引き取られる二十七日から八日へかけては泊まってもらったほどだ」

「中将はすっかりそのお方に帰依なさったのですね」

「そうだ。苦しい息の下で、ひじりに唱導されて、くり

返しお念仏をおとなえになった。あとで知ったのだが、
どうもそのひじりは法然お上人だったらしい」

「法然さま……ですか」

「いま明遍どのが言われたように、じつに頭脳の鋭い、
しかもおだやかなお人柄であった。ほんとうに惜しいこ
とだ」

大相国頼実の父左大臣経宗が薨じたのは文治五年（一
一八九）の二月二十八日であった。七十一歳。

まことに破乱にみちた生涯を送っている。

平治ノ乱には義朝、信頼に加担し、阿波ノ国へ流罪と
なった。許されて廟堂へ復帰すると、つねに九条兼実と
対立して画策した。死の直前にも平家を撃滅しそのまま
京都にとどまっていた源九郎義経と深く通じ、鎌倉の頼
朝追討の院宣を後白河上皇から取りつけてやったりし
た。九条兼実が頼朝の好誼を結んでいるのを知り、これ
を破壊するための政治的布石だった。

しかし、この院宣はすぐに鎌倉へ洩れてしまった。頼
朝は大軍をひきいて上洛してくると、洞喝してきた。後
白河上皇は狼狽して、追討令を今度は義経へ切り替えた
のである。政治的な立場を失った経宗は、すぐに官を辞

して隠棲した。病いを得たのだった。

父経宗の謀略の血は、たしかに大相国頼実にも流れが
よっていたのであろう。いわんや頼実には「女人ノ入
眼」と呼ばれた妻兼子がいる。

明遍は黙って大相国夫婦の会話を聞いていたが、頼実
の最後の言葉が気になった。

「惜しいこととは……どういう意味でしょうか」

「惜しいこと。法然ほどの人を……」

あとを濁ごした。

やっぱり……先刻来感じていた法然の身边に迫る危機
を、明遍は再確認したわけだ。

それにしても自分には直接法然へ通じる道がない。ど
うやってこの危険な事態を知らせたものか。

明遍はあの少年僧の顔を思い浮かべた。東山へ去った
光堂の番僧だ。彼しかパイプはないではないか。

一刻の猶予もなかった。明遍は岡崎の卿二位邸を
辞すと、足を東山へ向けた。

ところで、晩年の大相国頼実だが、建保四年（一二
二六）正月二十八日、いっさい政務から身を引いて出家し
ている。法名は顯性。

「一言芳談」によれば、頼実の顯性はいっばしの念仏ひじりである。

——心ノ専不專ヲ論ゼズシテ、南無阿弥陀仏ト唱フル声コソ詮要ト真実ニ思フ人ノナキナリ

——「仏助ケ給エ」ト思フ心ヲ、第一ノ良キ心ニテアルコトヲ、真実ニ思イ知ル事、人ゴトニナキナリ

——死ヲ急グ心バエハ後世ノ第一ノ助ケテアルナリ

念仏の功德をつたえる数々の言葉を残している。

わずか十年の歳月が人間の立場をこうまで変転させてしまうものであろうか。いや、これだからこそ末法末世だったのかもしれない。

ちなみに頼実を他力本願、念仏ひじりの道へ誘引した師は善恵房証空、直接にはその弟子浄音上人だったと言われている。嘉禄元年（一二二五）頼実は七十一歳で寂した。

寂したと言えば、卿二位兼子の最後は落魄の身とは言え粘り強い生への執念をとどめる。

承久ノ変突発の直前、公武合体を策して北条政子と取引を策したが、事が破れると兼子は俄然倒幕派の推進力となつて公卿団を後鳥羽院のもとへ結集させる。だが戦乱に利なく、官軍は潰乱状態におちいる。ここで彼女は変身の鮮かさを示して北条政子に取り入って生命は保証された。

だが、乱後は昔日の魔力を失い、わずかに確保し得た莊園も訴訟で争わねばならなくなつたり、群盜に荒らされた。

寛喜元年（一二二九）七月から八月へかけての定家の「明月記」は、兼子の消息にふれる。

七月二十一日。卿二品（兼子ノコト）ノ腫物、灸ニ及ブ（但シ飲水ノニアラズ、氣力、猶丁壯ノ如シ。定メテ無為カト云々、年七十五）

七月二十八日、卿二品又以テ時ヲ待ツガ如シ。苦痛ニ依リ叶フガ如クニ喚ブ

八月四日、二品滅氣ノ由、巷説ニ云々、晩、月見
ユ

八月七日、二品ノ親姪、近年放光ストイエドモ、
ソノ身スデニ沈淪。原憲ノ上、憐愍ノ限りニアラ
ズ、予ノ如キカ

八月九日、卿二品、昨日ヨリ唯氣バカリ通フ。今
朝辰ノ刻氣絶エオワンヌル由、下人等ノ説アリ。
又氣通ジ、事切レザル由ヲ称ス。法印未ノ時ニ及
ビ退キテ帰ル。暑氣、多スカタ無シ

八月十一日、卿二品、一定存生、成敗分明。家中
ノ雜物ニ至リテ覚悟ヘ目六ヲ書カシメ処分ヲ行フ。
臨終ノ沙汰等、自ラ詞ヲ加エラルト云々

八月十六日、卿二品辰ノ時バカリ遂ニ落命。門前
ノ車ヨウヤク散ジオワンヌト云々。後ニ聞ク、晩
ニ土葬ト云々

全身に腫れ物が出来て、苦患にさいなまされて死と闘
った様子がうかがえる。彼女が盛んな日は賄賂の金品を
せつせと運んだ藤原定家だが、一度たりとも見舞おうと
はしない。そのくせ情報の耳を澄ませて、その末期を適
確に把握しようとする。当時の貴族社会の体質が浮き彫
りされているようだ。

(つづく)

|| 新刊 ||

△幼児用▽ 教育えほん

『ほうねんさま』

B5判、表紙共一二ページ (カラー刷)

定価三〇〇円 (送料実費)

申込先――

〒102 東京都千代田区飯田橋一―十二―六

大道社

二 編集後記 二

○推理作家陳舜臣の短篇の中に「桃源遙かなり」という佳作があつて、その中に次のような詩文が引かれていた。

一 櫂ノ春風 一葉ノ舟
一 綸ノ蘭縷 一 輕ノ鉤

花 渚ニ満チ

酒 甌ニ満ツ

万頃ノ波中ニ自中ヲ得タリ

南唐の詩人李後主の詞であるというが、人生航路の荒波の中で、たとえ一刻でもこのような安楽境を得た唐の詩人が、私にはうらやましい。もちろん、「人生は苦楽相半ば」であつて、良いこともあれば悪いこともあり、幸せがいつまでも続くとは限らないし、また一人の人間にとつても必ずしも不幸の日々ばかりでもなからう。事実、李後主の時代の背後にも、すでに「宋軍の不吉な影がしのびより」、太平の夢は幾ばくの程もなく破れてしまつたのであるが。

実は私は、新緑の好季、この五月の大半の日々を病床に伏つていたのである。ちょっとした不注意から受けてしまった私の災禍が、結局多くの方々にご迷惑をおかけしてしまつた次第である。とくに『浄土』誌の敬愛すべき読者諸兄には、五月号の雑誌発送の大幅な遅れとなつてしまつたのである。心からお詫び申し上げると共に、皆様の暖かいご寛恕を乞うばかりである。法然上人讃仰会の零細、微力なる体資をはからずも暴露してしまつたわけであるが、この誌面をお借りして全国の読者の皆様に重ねてお詫びしたい。

病床に無聊を慰めながら、早く良くなつて元気に活動したいと思つた。何もすることができずにいることがいかに辛いことであるか、今本当にわかつたような気がする。——かの武陵の桃源は、ひよつとしたらこうして働いている日々忙しさの中にこそあるのかもしれない。

(原 裕)

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十七巻 六月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十六年 五月二十五日 印刷

昭和五十六年 六月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷 錦

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

＜浄土選書＞新刊本

第8号 梶原重道著
青春を生きる道 188ページ

—宗門学校に学んだ青春の喜びを、後輩に捧げる体験
的生き方をまとめた好書—

第9号 林 靈 法 著
釈尊出現の意義と浄土教 206ページ

—私の歩いた求道の遍歴—
—少年の日から悶々たる遍歴の中で求めた念仏生活開
拓の素描 念仏の風化を憂える信念の書—

既 刊 本

- (1) 仏教的生き方とは 松 濤 弘 道 著
(2) 仏像—その語りかけるもの— 石 上 善 応 著
(3) 善導大師—生涯と金言— 藤 井 実 応 著
(5) 浄土宗日常勤行式の話 乗 月 乗 光 著
(6) 大きく生きよう 高 橋 良 和 著

- ・体 裁 新書判 200ページ前後
・頒 価 480円（各1部とも）
・送 料 1部 200円（2部以上実費）

申 し 込 み

浄 土 宗 出 版 室

〒105 東京都港区芝公園4-7-4
TEL (03) 436-3351 (代)